特定非営利活動法人
シビルNPO連携プラットフォーム

CNCP通信 Vol 31

平成 28 年 11 月 8 日発行

巻頭言

建設分野でのソーシャルビジネスに若き「ソーシャルイノベーター」の参画を夢見る

（特非）シビル NPO 連携プラットフォーム 個人正会員
（株）日刊建設通信新聞社 取締役社長　　和田 惠

全国各地で持ち回り開催される日本建築家協会（JIA）のことしの年次大会「JIA 大阪 2016」に参加し、「ソーシャルイノベーター」なる言葉に出会った。語意から類推するに、ソーシャル（社会的）なイノベーション（革新）を実践する人であろうとは想像できる。しかし、浅学で、まことに恥ずかしい限りだが、その存在すら寡聞にして知らなかった。

困ったときのネット検索である。手元のスマホで、さっそく引いてみた。ウィキペディアが目にとまり「社会問題に対する革新的な解決法。既存の解決法より効果的・効率的かつ持続可能であり、創出される価値が社会全体にもたらされるもののことである。ソーシャルイノベーションを事業として起業すると社会起業家とよばれる」とある。その担い手がソーシャルイノベーターということのようだ。

とまれ、定義はともかく、シンポジウムに登壇した若者二人の活動紹介に刺激を受けた。一人は NPO 法人「Homedoor」の代表を務める川口加奈さん。若干 21 歳の現役女子大生である。その川口さんは、14 歳の時に大阪・釜ヶ崎のホームレスたちと出会い、交流を深める。市民グループの炊き出しなどに参加する一方、年間 200 人ほどのホームレスたちが凍死などにより亡くなる現実を知り、「なにかできないか」との思いを募らせたのだという。そこで始めたのが放置自転車などを譲り受け、ホームレスたちに修理してもらい大阪市内に〝レンタサイクル〟網をつくる事業である。現在では運営スタッフ５名、就労支援を受けている正規従業員（ホームレスだった人たち）は 30 名を数えるまでになった。いわゆる〝ドヤ街〟からの自立を後押ししている。

もう一人は、河内崇典さん。NPO 法人「み・らいず」の代表理事で、齢 34。「大学時代に友人から『いいバイトがあるからやらへん?』と言われて行った重度の身体障がいの方の入浴介助が全ての始まりです。障がいのある方と関わった経験もなく、最初は戸惑いましたが、『こんなに困っている人がいる、障がいのある人ってこんな想いをして生きているのだ』と、それまで何も知らずに生きてきた自分にも腹が立ちました。困っている人がいるのに何もしないのはおかしい、この状況をなんとかしたいという想いで大学在学中にボランティアサークルを作ったのが、み・らいずの前身です。そして 2001 年に NPO 法人み・らいずを、その仲間と立ち上げた」という。活動歴は 15 年になる。入浴介助後に「ありがとう」とお礼を言われるのが嬉しいと相好を崩す。

二人の活動は、当然ながらボランティアではない。いわゆる「ソーシャルビジネス」である。その意は、先の CNCP 通常総会で山本卓朗代表理事が唱えた①社会的課題を正しく捉え②多くの工夫を施しながら③その課題に対して適正かつ価値ある事業内容で解決を図っていく――ことと軌を一にする。二人の活動を知り刺激を受け、共感を得ながら、建設分野でのソーシャルビジネスを普及させる戦列に若者たちが加わる日の到来を念じた。